

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02380

研究課題名(和文) ポール・ヴァレリーのエクリチュールにおける知性とエロスの相克

研究課題名(英文) Intellect and eroticism in Paul Valery

研究代表者

松田 浩則 (Hironori, Matsuda)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：00219445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：1920年から28年まで親密な関係にあったポール・ヴァレリーとカトリーヌ・ポッジとの間で交わされた書簡集と、たがいの日記さらにはポッジの遺作『魂の皮膚』を主たる研究対象としつつ、「二人で一人、一人で二人」という究極的な愛の姿がどのような手続きを経て実現されようとしていたかを明らかにした。またポッジの遺作『魂の皮膚』に、彼女とヴァレリーを結びつけた熱力学の第二法則ならびにネグエントロピーの概念が生かされていること、そしてそうした考察が絶えず二人の身体をさいなむ「苦痛」と「快楽」を支配する意志のもとで行われていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Paul Valery (1871-1945) and Catherine Pozzi (1882-1934) who met for the first time in 1920 and separated 1928, wrote more than one thousand letters between them. In studying not only these soft end violent letters but also their diaries and Pozzi's "Peau d'ame", we revealed some peculiarities of their community of thought. (1) Their reflections on the body are similar and they both tried to escape the second law of thermodynamics by creating works of art. (2) "La Collinette", the villa she bought in Vence in the South of France was an important space to realize this community based on the unity of the two and the duality of the one. (3) The images Valery will use later in love with Jean Voilier, such as total feeling and intellectual harmonics, are already present in the letters exchanged between them.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：官能性 書簡 エクリチュール

1. 研究開始当初の背景

ポール・ヴァレリーの作品の上にカトリーヌ・ポッジがどのような影響を与えたのかに関しては、従来、ヴァレリーがポッジにささげた『魂と舞踊』などの対話作品を通して漠然とした関連付けしかなされてこなかった。その意味で、執筆活動と官能的経験とが密接に結びついているヴァレリー研究にとって大きな空白があった。とりわけ、ポッジがヴァレリーの『カイエ』に書き込みをしたり、ヴァレリーの思想を論評したりしたのと同様、ヴァレリーもまたポッジの作品の草稿を受け取り、厳しい批評を下したりしているが、こうした思考と思考の相克がどのような結果をたがいに及ぼしたのかについての研究はおこなわれていないままであった。また、ポッジはヴァレリーとの別離の原因について、ヴァレリーがポッジの作品を剽窃したことをその一因としたが、それが果たして根拠のあることなのかどうかに関してはきちんとした検証がなされていなかった。二人のめざした「思考の共同体」の破綻の原因を探るためにも、たがいの作品や日記を丹念に追いつつ、思考の動きの類似性と相違とをたどる作業が要請されているように思われる。

2. 研究の目的

ヴァレリーの作品の根本にある身体観がポッジとの交流を通してどのように生まれ展開していったのかを理解することで、彼の後期の傑作の数々の生成の秘密を明らかにすることを目的とした。さらにこれまでほとんど垣間見られることのなかったポッジの身体論『魂の皮膚』とヴァレリーの著述とを比較考察することで、互いの思考の共同ぶりがどの程度のものだったかを明らかにすることも目的とした。

3. 研究の方法

従来から研究の対象になっていたヴァレリーの『作品集』ならびに『カイエ』に加えて、ヴァレリーとポッジの間の往復書簡、さらにポッジの『日記』や『魂の皮膚』をコーパスに加え、総合的にヴァレリーとポッジのエクリチュールのあり方を考察した。その中で、たがいの発想方法や記述のあり方の特性に注目した。

4. 研究成果

(1) ヴァレリーとポッジを結びつけるきっかけになった熱力学の第二法則ならびにネグエントロピーの概念に関する考察がヴァレリーの身体論「身体に関する素朴な考察」やポッジの遺作『魂の皮膚』に生かされていることを明らかにした。ポッジは『魂と皮膚』の最後の断章で、「私は二つの身体を持っている」と書いた後で、その二つの身体を説明している。それによると、一つ目の身体は「肉と血」と呼ばれ、「きわめて大きな分子で

きた炭化水素」としての身体で、「食べ物を同化する」ことで成立している身体である。これは「熱力学第二法則に従うため、最終的には劣化せざるを得ない」。それに反して、「快樂と苦痛」と呼ばれる第二の身体は、「エネルギーでできているために、質量があるかぎりにおいては物だが」、「注意力で構成され、注意力に結び付けられ、質量を避けることができるという限りにおいて非=物という側面もある」とされる。つまり、「エントロピーに従うと同時にエントロピーから逃れることができ」、その意味で、「この世で唯一、熱力学第二法則を転倒させることができるもの」と想定されている。こうした解釈はヴァレリーを大いに刺激したことは想像に難くない。そしてこの身体論が、「快樂」と「苦痛」という数値化できないものをめぐって、それをどう位置づけるかに努力を注いでいることにも注目される。

(2) 病弱で結核を患っていたカトリーヌ・ポッジにとって、ヴァレリーはいわば地上から降りてきて地獄にいる自分を救済してくれるオルフェとみなされていたことを明らかにするとともに、そのようなオルフェウスとユーリディスとの創作の場として、ポッジが南フランスの別荘「ラ・コリネット」を考えていたことを明らかにした。この別荘は、ポッジにとっての理想郷ともいえる父方の領地「ラ・グローレ」に匹敵するものであった。ポッジはこの南フランスの別荘でなら、結核のために不自由をおぼえている呼吸も思い切りできるだけでなく、精神の安寧も得られるとしている。そしてこの別荘にはヴァレリー専用の部屋も用意されていて、二人にとってのエクリチュール生成の場であるし、「比較するもののない愛の場」と考えられていた。

(3) ヴァレリーとの思想的な接近の中で、ポッジのフランス語がしばしば標準的な表記法を無視したり逸脱したりする場面が多くでてきたことも明らかにした。たとえば、自らを女性と明示するような文法規則を意図的に無視することによって、女性の上のしかかる抑圧をはねのけようとする意図があったことを明らかにした。

(4) ヴァレリーが最初にポッジに送ったと思われる手紙には、「私は複数であり得るのでしょうか。私はたった一人なのでしょう。私は数と両立可能なのでしょうか」という一節があったとされる。これは端的にいえば、孤独の思考者・作家として、物を考え、書きつづけてきたヴァレリーが、今後、ポッジとともに考え、書く方向へと向かうことは可能かどうかという問いかけだと思われる。ポッジはこの手紙をさまざまに変奏させつつ、思考の共同作業は可能だと返事をしている。その後、ヴァレリーとポッジとの互いの思考

の理解が深まるにつれて、二人は、「二人で一人」、「一人で二人」という体制の確立をめざすようになる。それはヴァレリーに親しいナルシス関係の発展形とも考えられるが、それはおたがいを静的に見つめあう関係ではなく、たがいを強烈に刺激し、挑発しつつ、一種の共同体に到達するための作業であったと考えられる。二人は自らをオルフェウスとユーリディケスに例えるだけでなく、ダンテとベアトリーチェ、トリスタンとイゾルデ、ジークフリートとジークリンデなど神話的な存在やワグナーのオペラの登場人物にも例えたりするが、こうしたいわば絶対的状況のなかでの二人に自らをたとえつつ愛の共同体が夢想されていると考えられる。

(5) ヴァレリーとポッジの愛の絶対性を語る言葉の中に、その後のルネ・ヴォーティエとの愛やジャン・ヴォワリエとの愛を想起する表現がすでに登場していることが明らかになった。とりわけヴァレリーの最晩年の作品『わがファウスト』の「リュスト」第四幕を想起するものが数多くヴァレリーの筆から生まれている。「無限に純粋な倍音」になることもあれば、「反抗的な倍音」になるときもあるポッジに向かって、「二人には距離があり、いろいろなことがあるけれど、私たち二人から引き出すべき知性と優しさがあるはず」と力説するヴァレリーは、「リュスト」第四幕で問題になる「全面的感情」を先取りするとも思われる愛の言葉を書いている。「あなたにはわかるでしょう、私があなたのことを妹として、妻として、プシシェとして、エロスとして、どこまでも親密な友として愛していることを。そして、私はあなたの見事なネックレスから何も取り除くことはできません。私は真珠を結びつけている糸を切ることはできません。宝石のたとえのない希少性はこの結びつきに由来するのです。ひとつの真珠を見つめている私は別の真珠へと送られ、こうして、その光沢から光沢へと私は無限にあなたを追いかけます。いとしい人、それはあまりにも完璧で、不可欠で、レオナルドの周囲に閉じられたあなたを愛するということなのです」。ポッジの首にかけられた真珠のネックレスの輝きは彼女の美と知性の十全さへの称賛であろうが、これはそのまま後のジャン・ヴォワリエに語る時に頻出する王冠、コロナ、コロナを想起せずにはおかないだろう。また、ヴァレリーは1921年6月半ばにポッジに送った英国詩人アルフレッド・テニスの詩集『女王』中の詩句を1938年4月6日に書かれたと推定されるヴォワリエ宛の手紙にも書いている。ある意味で、ヴァレリーにおける愛の究極の形の原型は、ポッジとの経験を経ることによって作られていったのではないかという推定が成り立ちうるものと思われる。

(6) 「観念同士の結婚」あるいは「絶対の結婚」という、相互の思想にたいする情け容赦のない批判の作業と周到な突合せの作業から観念上の子どもが生まれるとの夢想が二人の間で共有されていたように思われる。この点でも、後年の『わがファウスト』の「リュスト」の第四幕を先取りしているように思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

松田 浩則 Paul Valéry, *Lettres à Jean Voilier, Choix de lettres, 1937-1945*, ヴァレリー研究、第 6 号、2016、32 - 44、www.geocities.jp/paul_valery_japon/Valery-Kenkyu.html

松田 浩則 Catherine Pozzi / Paul Valéry, *La flamme et la cendre*, ヴァレリー研究、第 7 号、2017、89 - 99、www.geocities.jp/paul_valery_japon/Valery-Kenkyu.html

松田 浩則 ポール・ヴァレリーとカトリーヌ・ポッジ - エクリチュールの相克、『芸術照応 ヴァレリー論集』、水声社、2018 (出版予定)

〔学会発表〕(計 3 件)

松田浩則、ヴァレリーとジャン・ヴォワリエ、日本ヴァレリー研究会、2016.1.30、一橋大学 (東京都)

松田浩則、ヴァレリーとカトリーヌ・ポッジ『炎と灰』、日本ヴァレリー研究会、2017.1.28、東京大学 (東京都)

松田 浩則、ポール・ヴァレリーとカトリーヌ・ポッジ - エクリチュールの相克、2017年度秋季日仏シンポジウム「芸術照応の魅惑3」、2017.10.22、日仏会館 (東京都)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 浩則 (MATSUDA Hironori)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：00219445

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()